

「只見 移住物語」

おおぎやほんかん
扇屋本館 つばめ荘

【移住者のご紹介】

- ・お名前：広井 トヨ子様（70 歳）
- ・いつ：2003 年（平成 15 年）12 月 14 日
- ・どこから：福島県 福島市
- ・どこへ：大字只見 沖
- ・今していること：*^{おおぎやほんかん}扇屋本館 つばめ荘（下宿業）

*扇屋 本館 つばめ荘

1937 年（昭和 12 年）「扇屋 本館」が、呉服、雑貨、米、塩、山菜仕入などを扱う総合商店として誕生する。第二次世界大戦を経て、戦後国策復興として進められた只見川電源開発に沿って 1953 年（昭和 28 年）田子倉ダムの着工があり、その翌年 1954 年（昭和 29 年）に旅館「扇屋 本館 つばめ荘」がオープンする。

以来「扇屋 本館 つばめ荘」は電源開発関係者、政府要人、著名人の宿泊、休憩施設として只見町の迎賓館としての役目を果たす。後継者難と高齢化のため 1994 年（平成 6 年）最後の宿泊客を見送りして、その歴史を閉じた。そして 2004 年（平成 16 年）に、再び扇屋 本館 つばめ荘としての歴史を紡ぎ始める。

「扇屋 本館 つばめ荘」に宿泊、立ち寄った電源開発関係者・政治家・著名人 一部抜粋（敬称略）

- ・皇族 鷹司の宮
 - ・皇族 高松宮
 - ・政治家 吉田茂
 - ・政治家 田中角栄
 - ・政治家 三木武夫
 - ・小説家 司馬遼太郎
 - ・小説家 曾野綾子
 - ・大相撲 第四十一代目 横綱 千代の山
 - ・女優 音羽信子
 - ・歌舞伎俳優 中村吉右衛門
 - ・米国 海外技術調査団(OIC)一行
- ・まえにしていたこと：福島市 交通安全 母の会、福島 いのちの電話、他ボランティア



つばめ荘 扇屋本館 ロビーにて

福島市ではボランティア活動をしていました。「福島市 交通安全 母の会」とか「福島 いのちの電話」のボランティアです。お友達に頼まれてサークルを立ち上げるのを手伝ったりしていました。役員名簿を作ったり、会の規約を考え、ワープロ(当時はワープロ全盛期)で文章にまとめたりする作業とか。気がついたら肩書きが20以上あって、疲れはしませんでした。自分の時間はすくなくってですね。

只見町を知るきっかけは、ある新聞記事を見たことです。『老舗旅館売ります』という*記事でした。読売新聞(2003年6月8日付)に載っていました。この記事を読み、只見町のことを知り、この建物が頭から離れなくなってしまいました。

*読売新聞(2003年6月8日付)掲載記事から一部抜粋

『戦後復興の国策として進められた電源開発に際して建てられ、ダム工事の視察に訪れた吉田茂・元首相らが宿泊したことで知られる只見町只見の老舗旅館「扇屋 本館 つばめ荘」が、建物の老朽化などから売却されることになった。政治家や女優、大相撲

の力士など「昭和」を彩る著名人も数多く宿泊した“歴史の証人”ともいえる建物だけに、関係者は「このまま保存してくれる人買い取って欲しい」と話している。』

記事を見てすぐに只見町を訪れました。当時 幾つものボランティアやサークルの役員をしていましたので、なかなか時間がとれませんでした。この建物を扱う不動産業者「たもかく（現 みんなの森協同組合）」と打合せできる日を決めて訪れました。確か日曜日だったと記憶しています。建物を見るなり、一目惚れしてしまいました。その日に購入契約をしました。

【準備】【現在】

この建物を買った時点では旅館業とか下宿屋をするとか、そんなことは全く考えていなかったのです。この家を心底 好きになったので買いました。

私の苗字が^{ひろい}広井でしょ、だから私、よく冗談でお友達に「苗字が^{ひろい}広井なのだから、^{ひろい}広い家に住みたい」って言っていたの。だから福島市でも、色々な人に声を掛けて家を探していました。「あれはどう」、「これはどう」と声を掛けてもらい、見て回りましたが、なかなか眼鏡に叶うものがなくて、諦めかけていたら、この建物に出会いました。建物を見に来た日に購入契約しました。

暮らし始めるために改修工事が進みました。確かに「^{ひろい}広い家に住む」ことが希望でしたが、あまりにも大きいので、あの階段の奥から先の部分を取り壊しました。そこには旅館の台所やお風呂といった「水回り」がまとめられていたので、私が暮らすための「水回り」を作る改修工事をしてもらいました。

ボランティア、サークル仲間や、お友達から「どんな家を買ったの」、「家を見たいから連れて行って」と言われ、私が旅館に残された備品等を整理するために只見へ来るときは、誰かしらを車に乗せ連れて来ました。改修工事も終わり、いよいよ福島市から引っ越す時には、それまで「貴女が只見へ行ってしまったら、この会を誰がまとめるの」とか「寂しいから行かないで」と言っていた人達が、みな理解してくれて気持ちよく送り出してくれました。20を超える“お役”を、引っ越しに伴いすべて“役落とし”しました。今年で17年目になります。

私は、福島市から只見町へ移り住んだことを「移住」とは考えていません。私の気持ちは「移住」といった重い感覚ではなく“ちょっと住む場所が変わる”そんな感じですね。ですから不安を感じたことは全然ありません。まったく血縁関係があるわけでもないけれど、この建物の中にいると、全身がフーンと包まれるような、古巣に戻ったような感覚

になります。本当に安心して暮らしています。近所の人「あんな大きな家に一人でいて、怖くないのか」って心配してくれますが、なにも怖い事なんかありません。

2004年（平成16年）役場から頼まれて只見高校の山村留学生3人、4人受け入れたことがありました。それが下宿屋の始まりでした。いまは工事関係の人を中心に受け入れしています。

冬の間の除雪は、スノーダンプでしています。私一人で。そのの堀に雪を運んで落とす作業を、何百回と一日中しています。朝3時ごろブルが通ると、旅館の出入り口前が雪でふさがってしまうでしょ、雪が固まって塞いでしまうので出入口を空けないと、お客さんが外に出られなくなってしまうので雪かきしています。堀の水が雪を持って行ってくれるのでありがたいですね。先ず出入口をやって、お客さんがいる時は、車を置く場所は自分たちで除雪して下さいってお願いします。工事関係のお客さんなので『会社に、いろんな機械があるから大丈夫だよ』って協力してくれます。

除雪は、ほとんど私一人で、今のところはやっています。そのうち体力が無くなったら、機械を持っている人にお願いすることになるかもしれません。でも私は冬が来て除雪は楽しみにしています。雪は好きです。スポーツクラブに行っているかのように汗をかいて健康面にも良いでしょ。



つばめ荘 扇屋本館 角から撮影

【変化】【将来】

何も役を持っていないので、好きなように時間を使えるので、のんびりと暮らしています。行きたいときに、行きたいところへ行く。ただお客さんがいるので、毎日三度の食事があるので遠くにはゆけません。一人だから大変でしょうと言う方もいますが、一人だから気楽にできるのかもしれないね。

私はこういう商売が自分に合っていると思います。天職だと思っています。楽しくてしょうがないですよ。それも、この家に巡り合えたからです。体が続く限りこのまんま、お客さんを泊めて、食事を作って生きていきたいですね。

体が続く限りは、よほどの大事件、大事故がない限りね。そう事故と言えば9年前に大水害（2011年7月 新潟・福島豪雨）がありましたけど、そのこのふすまの汚れ（水が上がってきたライン）まで水が来たの。だから1階は、床板をはがして、土台から全部を新しくしました。だから建物は古いけど、下（主要構造体）は若いのよ。

楽しみにしていることは毎日の仕事、後はコロナ渦が収まって孫が来てくれることかな。今年 生まれた孫の顔をまだ見ていないの。

【不便】

只見の生活には、すーっと入り込めたので、暮らし始めて困ったことはありません。

【健康】

元気です。お医者さんに通っていません。いたって健康です。

【アドバイス】

助言はありません。来られる方の理由がそれぞれ違うし、どのような生活をしたいか違うわけだから、そこへなんだかんだと言っても、その人流に生活して生きて行かなければならないので助言というものはありません。

【生活】

自然体を心がけました。ご近所のおばあちゃん達は定期的に薬を貰いに診療所に通っているでしょ、その送り迎えをしました。診療所への送り迎えは午前中なので、お客さんがいても出来る。出来ることを、無理なく、気がつけば、何年もしていましたね。

2020年9月4日 つばめ荘 扇屋 本館 ロビーにてインタビュー
インタビュアー 移住コーディネーター 生天目 博